

『ローマ散歩』の テキストをめぐって II

白 田 紘

序

わたしは、先にスタンダールStendhalの『ローマ散歩』PROMENADES DANS ROMEのテキストに関して記した小論¹⁾のなかで、1829年に出版された初版のテキストが、著者没後の1853年にミシェル・レヴィ *Michel Lévy frères* から出版された第2版において、スタンダールの従弟で編者のロマン・コロム Romain Colombによってどのように改変されたか、また初版を忠実に収めたと称するもっとも最近のテキストである1973年刊行のプレイヤード版 *Bibliothèque de la Pléiade* 所収のものが、いかにミシェル・レヴィ版の〈桎梏〉をまぬがれていないかを明らかにした。その際、20世紀にはいつて刊行されたふたつの大きなスタンダール全集、ディヴァン版 *édition du Divan* とシャンピオン版 *édition de Champion* 所収の『ローマ散歩』については、「編者たちは初版を尊重しながらも、この版（ミシェル・レヴィ版）を踏まえて、それぞれに訂正や、あらたに発見された自家本によって改訂ないし増補を行なっている」とだけ記して、その実際の検証は行なわないままで通り過ぎた。しかしながら、こうした簡単な記述でこのふたつの全集のテキストを片付けるのは、長いあいだスタンダール研究に貢献してきた原典としての両者をあまりに粗略に扱うことになるであろうし、わたしにそのつもりはないにしても、編者のアンリ・マルティノ Henri Martineau とアルマン・カラッチョ Armand Caraccio の二人の先駆者の業績を蔑ろにしていると受け取られかねない。わたしは本稿で、先の小論の補遺として、これら全集の『ローマ散歩』のテキストが、ミシェル・レヴィ版のテキストをどのように踏まえて、独自のテキストを作り出しているかを明らかにし、場合によっては、編者たちの業績を再評価したいと思う。

1. ディヴァン版

アンリ・マルティノ編集の全79巻（内4巻が索引、他にスタンダール宛書簡集が4巻）におよぶスタンダール全集のなかで、『ローマ散歩』は1931年に3巻で出版されている。この版のこのテキストの特色は、ミシェル・レヴィ版で改訂に使用されたスタンダールの自家本であるいわゆるセルジュ・アンドレ本 *exemplaire Serge André* の書き込みを尊重して、本文中でミシェル・レヴィ版が行なったのと同じ訂正、増補をしているばかりか、独自の訂正、

増補を行ない、このことを脚註で明らかにし、さらにこれとは別に、この自家本に基づいて45箇所に関与する独自の脚註を付けていることである。また、これに付け加えて、ロワイエ本 *exemplaire Louis Royer* (別名クロゼ本 *exemplaire Louis Crozet*)²⁾、ラ・ボーム本 *exemplaire La Baume* からの脚註をそれぞれ18箇所、5箇所を付けている。

これらの自家本は、おもに1831年以降、スタンダールがチヴィタヴェッキアに領事として駐在していたときに、無聊を慰め、いずれ『ローマ散歩』の第2版を出版する目的で、手を加えていたものである。ロワイエ本は、初版の2巻を4巻に分冊し、白紙をあいだに挟みこんで装丁し、最初の2分冊に書き込みのある自家本で、ルイ・ロワイエが1923年に『愛書家通信』BULLETIN DU BIBLIOPHILE掲載の「友人クロゼ所蔵のスタンダールの書籍」*Les livres de Stendhal dans la bibliothèque de son ami Crozet* において公表したものである。一方、ラ・ボーム本は、初版本刊行の翌年にベルギーで出版された海賊版への書き込みであるが、ラ・ボーム侯爵 *marquis de La Baume* が所有していたものを、エドゥワール・シャンピヨン *Edouard Champion* が『エディション・ド・スタンダール・クラブ』EDITIONS DE STENDHAL CLUBの第19巻(1926)として「『ローマ散歩』の新しい書き込み本」*Un Nouvel exemplaire annoté des Promenades dans Rome* の表題で公表して知られるようになった。そして最後に、もっとも重要な自家本がセルジュ・アンドレ本である。これは初版本2巻の各巻の巻頭巻末に白紙を綴り込み、そこに書き込みをしているが、そのみならず本文中にも多数の書き込みがあるという貴重な自家本である。これはすでに記したようにロマン・コロンのミシェル・レヴィ版で改訂に活用したものであることが判明しているが、20世紀に入ってそのコロンの所有していたコピーが、カジミール・ストリヤンスキー *Casimir Stryenski* によって『スタンダール・クラブの夕べ』SOIREES DU STENDHAL CLUB deuxième série (1905) のなかで「『ローマ散歩』の余白に」*En marge des Promenades dans Rome* という表題で発表され、その後、ジャック・ブーランジェ *Jacques Boulanger* によって、セルジュ・アンドレが原本を所蔵していることが発見されると同時に、その全貌が明らかにされたのである³⁾。

アンリ・マルティノは初版を尊重する立場から、これらの自家本の書き込みに基づき改変した箇所については、丹念な註釈によって初版との相異を明らかにしている。とりわけ、本文中で増補したものについてはクロシェ [] によってその部分を示すなどして、読者にとって分かりやすいものとなっている。そして、ミシェル・レヴィ版で削除された部分についても、自家本での指示がないかぎり、初版を忠実にまもり、削除しないで収めている。

以下に、こうしたディヴァン版における編者のテキストの扱い方を検証してみたい。

a. ミシェル・レヴィ版に基づく訂正

まずは、のちにセルジュ・アンドレ本と呼ばれる自家本に拠って第2版にあたるミシェル・レヴィ版でロマン・コロンが改訂し、ディヴァン版が踏襲した箇所を、その註によって拾い出し、初版と対比してみよう。[] 内が初版のものである。

- (1) 1827年8月18日付 (v.1-p.36) : La statue colossale de Néron en marbre et de cent dix pieds [La statue colossale de Néron] 下線部の追加
- (2) 1827年11月2日付 (v.1-p.131) : la grande route [la grand'route]
- (3) 1827年11月11日付 (v.1-p.147) : son voyage, protégé par les industriels, a eu quarante éditions [Son voyage a eu quarante éditions] 下線部の追加
- (4) 1827年11月12日付 (v.1-p.148) : Les différencesのあと, que l'on remarque [que j'ai notées]
- (5) 1827年11月24日付 (v.1-p.214) : rempli de personnages [rempli de gens]
- (6) 1827年12月16日付 (v.1-p.260) : Cesarini Sforza [C***S***]
- (7) 1828年5月5日付 (v.2-p.72) : Jules II fit détruire les fresques des autres peintres. [En la voyant Jules II ordonna que des maçons détruisissent à coup de marteau les fresques des autres peintres.]
- (8) 1828年5月5日付 (v.2-p.90) : L'un des tableaux voisins nous montre Grégoire IX ~ [L'un des tableaux voisins nous représente Grégoire IX ~]
- (9) 1828年5月30日付 (v.2-p.123) : La hauteur (中略) faisait obstacle à ce que ~ [La hauteur (中略) était un obstacle à ce que ~]
- (10) 1828年6月1日付 (v.2-p.136) : on aperçoit au-dessus de quelques bastions fort bas une masse ronde ~ [Au centre de quelques bastions fort bas s'élève une masse ronde ~]
- (11) 同 (v.2-p.143) : venticello ponentino [venticello] 下線部の追加
- (12) 同 (v.2-p.144) : Clément VII s'y refusa avec hauteur, et ~ [ClémentVII ne voulut pas le permettre, et ~]
- (13) 1828年6月27日付 (v.2-p.232) : L'immoralité profonde (中略) a disparu peu à peu, et l'esprit avec elle. [L'immoralité profonde (中略) a disparu peu à peu, l'esprit l'a suivi.]
- (14) 同 (v.2-p.235) : M. d'Izoard [M. D.]
- (15) 1828年6月15日付 (v.2-p.256) : la circonférence [le diamètre]
- (16) 1828年6月25日付 (v.2-p.259) : en leur faisant voir des ruines laides pour des yeux dévoués à la mode [en leur faisant voir des ruines] 下線部の追加

- (17) 1828年7月4日付 (v.2-p.299, note) : le cardinal Macchi [le cardinal] 下線部の追加
- (18) 1828年7月5日付 (v.2-p.303) : le double portique fort joli [le double portique] 下線部の追加
- (19) 同 (v.2-p.303) : la bénédiction [sa bénédiction]
- (20) 同 (v.2-p.304) : une mauvaise statue de Constantin [la statue de Constantin]
- (21) 同 (v.2-p.306) : Il faut se faire ouvrir la jolie grille [Il faut se faire ouvrir la grille] 下線部の追加
- (22) 同 (v.2-p.306) : des savants antiquaires [des antiquaires] 下線部の追加
- (23) 同 (v.2-p.308) : dans la croisée à gauche [dans la croisée] 下線部の追加
- (24) 同 (v.2-p.309) : Qu'est-ce qu'un grand seigneur sans les dorures, les couleurs, les voitures, le faste et toute cette magnificence lumineuse qui vaut le respect de ses voisins? mais ils sont sérieux, sournois, et surtout moins galants ~ [Qu'est-ce qu'un grand seigneur sans le profond respect de ses voisins? mais ils sont moins magnifiques, et surtout moins galants ~]
- (25) 同 (v.2-p.312) : en approchant de la Douane de Rome, Porta del Popolo [en approchant de la Porta del Popolo] 下線部の追加. ただし, ミシェル・レヴィ版では Porta del Popolo のまえに près が入っている
- (26) 1828年7月8日付 (v.2-p.333) : nous sommes allés rejoindre nos compagnes de voyage sur le mont Coelius. [nous sommes allés rejoindre nos compagnes de voyage à la Navicella, charmante église située sur le mont Coelius. L'architecture est de Raphaël:] 下線部の削除
- (27) 1828年10月2日付 (v.2-p.359) : une Madoneのあと, que l'on nous a montrée à droite de la porte ~ [que l'on nous a montrée au-dessus d'une porte ~]
- (28) 1828年10月3日付 (v.3-p.7) : on l'a trouvé froid dans la rue [on l'a trouvé mort]
- (29) 同 (v.3-p.9) : C'était un très bel homme, mais fort brun. Il avait l'air timide. [C'était un très bel homme, mais extrêmement brun. Il avait l'air fort timide.]
- (30) 同 (v.3-p.10) : Cette réponse désespéra Fabio; cependant il ne put prendre sur lui de quitter Ravenne. [Fabio fut désespéré, cependant il ne quitta point Ravenne.]
- (31) 1828年10月5日付 (v.3-p.20) : fresques divines de Dominiquin [fresques du Dominiquin] 下線部の追加
- (32) 同 (v.3-p.23) : Quelques lecteurs libéraux, blessés de ce que les jésuites oppriment la France (1829), trouveront ridicule la proposition ~ [Quelques lecteurs libéraux

trouveront ridicule la proposition ～] 下線部の追加

- (33) 同 (v.3-p.40) : L'autel principal a une copie du tableau, attribué à Raphaël [L'autel principal a une copie du tableau de Raphaël] (註なし)
- (34) 1828年10月20日付 (v.3-p.84) : le péché de tout le monde [la passion de tout le monde]
- (35) 1828年12月20日付 (v.3-p.246) : Rome, 10 février 1740 [Rome, 10 mars 1739] (註なし)
- (36) 1828年12月22日付 (v.3-p.253) : les hommes que réunit une grande ville au nombre de plus d'un demi-million sont ～ [les hommes réunis au nombre de plus d'un demi-million sont ～]
- (37) 同 (v.3-p.253) : vous trouverez en France [vous trouverez] 下線部の追加
- (38) 1829年3月31日 (v.3-p.337) : après quoi il s'est fait un silence [et il s'est fait un silence]

見て分かるように、年号の訂正1箇所、イニシャルや名詞に固有名詞を入れているところが3箇所あるほかは、すべて表現の変更に関係する。(15)のように「直径」diamètreを「周囲」circonférenceに訂正するような重要なものもあるが、形容詞、形容句、副詞、副詞句、接続詞などを短く追加、変更、削除しているもの、文章をより簡略に、もしくはより詳細に、そして適切に、場合によっては正確な言い方に直しているものである。(29)においては、短い文のなかでtrès, extrêmement, fortと3個の強調をあらわす副詞を用いているのを訂正している。(26)においては、目的地がナヴィチェツラから、これが存在するチェリオ丘に変わっているが、スタンダールは初版を出版後、ナヴィチェツラに対する評価を下げていることから、こうした訂正が起こったと考えられる。

以上のほかに、セルジュ・アンドレ本にないミシェル・レヴィ版の訂正をそのまま採用しているところが50箇所以上あるが、註をつけているところは1箇所しかない。それは28年3月7日付 (v.1-p.329) の「カトリック教にとって栄えある出来事のなかに」 parmi les événements glorieux pour le catholicisme と au catholicisme を変更している箇所である。註のないところでも、語句の追加については、セルジュ・アンドレ本に基づくミシェル・レヴィ版の訂正の採用と同じくクロシェ [] を付しているのので、諸版を対比して検証すると、ミシェル・レヴィ版固有の訂正をマルティノが採り入れたものかどうか判明する。それらは、たとえば、次のようなものがあげられる。下線部がテキストでは [] によって補われているところである。

- (1) 1827年10月28日付 (v.1-p.130) : c'était comme à Paris recevoir un soufflet sans en

demander raison.

- (2) 1827年11月24日付 (v.1-p.172) : le jeudi saint, le jour de Pâques, et celui de l'Ascension, le souverain pontife donne la bénédiction
- (3) 1828年4月29日付 (v.2-p.64) : de me voler uniquement par curiosité
- (4) 1828年5月5日付 (v.2-p.75) : baptistère qui existe encore près de Saint-Jean-de-Latran sous le nom de San Giovanni in fonte
- (5) 1828年6月27日付 (v.2-p.235) : l'ambassadeur de France, M. de Blacas
- (6) 1828年7月6日付 (v.2-p.317) : pour arriver à la magnifique chapelle de Sixte-Quint, dans laquelle il repose
- (7) 1828年10月5日付 (v.3-41) : La façade actuelle est du terrible M. Valadier [La façade actuelle est de M. Valadier]
- (8) 1828年10月16日付 (v.3-62) : Ce cardinal (中略) annula toutes les lois et tous les règlements

状況補語 (副詞, 副詞句, 副詞節) など, 補足がなくても特に差し支えないものが大多数だが, (2) は事実上, (8) は文法上補うことが不可欠であろう。

さらに, ミシェル・レヴィ版の訂正で初版と大きく違うところでは, 1827年12月5日付 (v.1 p.225) に引用されているマリアとグレゴリウスの対話のラテン語原文が, 本文中から註に移されている点だが, デイヴァン版でも断りなくこれを踏襲している。煩雑なので註に移動したところだろうか。また, セルジュ・アンドレ本=ミシェル・レヴィ版によって訂正したのと同じように, ミシェル・レヴィ版によって人物のイニシャルをフルネームになおしている。スタンダールには馴染みの J.-C. が《Jésus-Christ》となおされるのと同様に, 1828年4月18日付 (v.2-p.49) では初版の M. le duc de L が《M. le duc de Laval-Montmorency》となっている。ただし, 27年7月20日付 (v.1-55) に《M. de La***》があるが, これは註で「クロゼ本に M. le duc de Laval と訂正されている」と指摘するに留まっている (後出) し, 28年6月20日付 (v.2-p.200) の《M. de Lav***》については, やはり註で M. de Lavalette であることが記されている。他に, 人名ならびに地名の訂正が相当数ある。Franz [Franck], del Negro [di Negri], Duquesnois [Quesnoy], Niccolini [Nicolini], Quarantotti [Quarantini], Théodon [Tendon], Villermé [Vuillermé], Richmond [Richemont] などである。ほとんどは誤植やスタンダールの記憶違いで綴られたと考えられるものを, 正していると言ってよいだろう。

同じく, ミシェル・レヴィ版に倣って日付が細かく入っている箇所が次のようにある。27年8月16日付 (v.1-p.28) で, サン・パオロ・フォーリ・レ・ムラ聖堂が焼失した年に《dans la nuit du 15 au 16 juillet (en 1823)》と月日を, また28年6月1日付 (v.2-p.177)

で、グラン・ダルメの円柱が完成した年に月日《le 15 août (en 1810)》が追加され、29年2月1日付 (v.3-p.288) で、コロン氏がナポリで駅馬車強盗に遭った日付が《5 mai 1828》と括弧付きで入れられている。

ついでに、数字の訂正を見てみると、27年11月24日付 (v.1-pp.172, 175) のサン・ピエトロの記述の中で、ベルニーニの大天蓋の舗石から天辺までの高さが初版の「89ピエ」から「86ピエ」、ルーヴルの列柱の破風と比べたその高さが「24ピエ」から「21ピエ」に訂正されている。

その他の訂正では、avant que～に導かれた副詞節のなかの虚辞のneをすべて削除するなど無意味と思われる細ごましたこともしている。27年11月24日付 (v.1-p.183) では初版の「黒味を帯びた赤」un rouge noirâtreを「赤味を帯びた黒」un noir rougeâtreに改めているが、このふたつは別物に思えるものの、やはり前者は耳慣れない表現であり、訂正されるべきものなのだろう。また27年12月28日付 (v.1-p.274) ではアラコエリ教会の幼子イエスの人形について、il Sacro Bambino, cet enfant de cireを《il Santo Bambino, cet enfant de bois d'olivier》に変えている。実際、この人形は蠟人形ではなくオリーブの木の人形であるので、スタンダールの事実誤認を訂正している訳である。ミシェル・レヴィ版のこうした訂正をディヴァン版ですべて受け継いでいる。

b. ミシェル・レヴィ版に基づく増補

まず、増補とはここではセンテンスないしはセンテンス相当句がひとつ以上加えられた場合と理解されたい。

これについては、はじめに記したように編者はクロシェ [] によってその部分を明らかにしているが、そこには、先の訂正同様に、ミシェル・レヴィ版が独自に増補し、その理由が明らかでないものも含まれているので、まずここではそれがセルジュ・アンドレ本に依拠しているもの（つまり、セルジュ・アンドレ本＝ミシェル・レヴィ版）を列挙してみる。

- (1) 1827年8月29日付 (v.1-75～78)：ガイドの『曙 (アウロラ)』およびサンタ・マリア・デリ・アンジェリ教会に関する記述、約4ページ
- (2) 同 (v.1-p.85)：ラファエッロについて記している部分で短く「かれはミケランジェロの同時代に生まれたことで天に感謝していた」Il remerciait le ciel de l'avoir fait naître du temps de Michel-Ange. と追加
- (3) 1827年10月12日付 (v.1-p.126)：ギリシア人のイタリアへの入植に関して、12行
- (4) 同 (v.1-p.127)：ローマ人の文明がエトルリア人に遅れていたことについて、7行
- (5) 1827年11月6日付 (v.1-p.140～142)：エトルリア人について
- (6) 1827年12月25日付 (v.1-p.268～273)：カザノヴァの回想録からの引用

- (7) 1828年3月10日付 (v.1-p.338～339)：アウグストゥスの宮殿について、1ページ分
- (8) 1828年4月5日付 (v.2-p.38, note)：アクワ・トファナについて
- (9) 1828年4月17日付 (v.2-p.43, note)：聖ペテロはローマに来たことがあったかどうかという疑問
- (10) 1828年6月2日付 (v.2-p.101～102)：ローマを敵視しているポールが語ったこと、約2ページ分
- (11) 1828年6月1日付 (v.2-p.140)：サン・タンジェロ城の天辺の天使像について3行
- (12) 1828年6月26日付 (v.2-p.226, note)：ドイツの学生の生態に関して
- (13) 同 (v.2-p.227, note)：ウェルテルについて
- (14) 同 (v.2-p.229, note)：ドイツでは結婚はすべて恋愛結婚であると述べた箇所に、「それは70年前のこと」C'était il y a soixante-dix ans. と付している
- (15) 1828年6月27日付 (v.2-p.232)：ローマでは他所と同じでこのうえない阿呆が支配する力を握り、支配者を恐れさせていると述べたあとに、「これぞ復古精神だ」Voilà l'esprit des restaurations. と付け加えている
- (16) 1828年6月27日付 (v.2-p.235～236)：ローマで給付金を支出することの補足を9行に涉って追加
- (17) 1828年7月1日付 (v.2-p.281)：カプチン会士教会のドメニキーノ、サッキ、ジョットの作品に関して7行
- (18) 同 (v.2-p.281)：若い僧侶の失踪に関する逸話、11行
- (19) 1828年7月8日付 (v.2-p.329, note)：インド女性の自殺について
- (20) 1828年10月5日付の「ローマの教会」では多くの増補がなされているが、アラコエリ教会 (v.3-p.21) には、「古代のユピテルの神殿」という記述のあとに「魅力的な教会、そして入口からの見事な眺め」Charmante église, et vue superbe de la porte と追加
- (21) 同、サン・グレゴリオ教会 (p.22) では、ガイドのフレスコ画についての記述14行が追記されている
- (22) 同、サン・ピエトロ・イン・ヴィンコリ教会 (p.22) では、説明の最初に「ギリシア大理石の美しい古代柱」Belles colonnes antiques de marbre grec. と挿入
- (23) 同、サン・カルロ・アッレ・クアトロ・フォンターネ教会 (p.28) では、「サン・ピエトロの円天井を支える4本の支柱のひとつの柱脚と同じ面積であるゆえに有名」célèbre parce qu'elle couvre une surface égale à la base d'un des quatre piliers qui soutiennent la coupole de Saint-Pierre と補っている
- (24) 同、サン・ルイジ・デ・フランチェージ教会 (p.33) では、あいだに、聖女カエキ

リアのフレスコ画に関する9行の文章を追加

- (25) 同, サンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ教会 (p.37) には, そこに建設されている墓碑に関して, 20行が追加されている
- (26) 同, サン・ピエトロ・イン・モンテリオ教会 (p.42~43) は, この教会前から眺めたローマの眺望などについて追加し, 初版の記述を4倍にもしている
- (27) 同, サンタ・サビーナ教会 (p.44) には「魅力的な教会」*Charmante église*と最初に挿入されている
- (28) 1828年10月15日付 (v.3-p.60): 「もしマザッチョが(…)百年遅く生まれたら, かれはラファエッロにとってライバルとなったであろう」という文章のあとに「それは同じ天才であった」*C'était le même génie.*と文章を追加
- (29) 1828年10月16日 (v.3-p.76, note): 秘密結社カルボナリの起源についての註. これはミシェル・レヴィ版の註としている
- (30) 1828年10月20日付 (v.3-p.121, note): 今日では強盗団よりも警察に煩わされるという付註
- (31) 1829年2月18日付 (v.3-p.315): アルバーニ枢機卿がピウス7世の墓をサン・ピエトロ大聖堂に置くことを認めようとしないことについて, 5行

セルジュ・アンドレ本に拠らずに, ロマン・コロンがミシェル・レヴィ版で独自に増補した箇所の子ヴァン版での採用は, 本文では1827年11月24日付 (v.1-183) 「古代にはファナティズムがなかった」云々の5行, 12月13日付 (v.1-p.257) の「ローマの極右主義者」について記した6行にとどまり, 他は註であげている。それらは28年7月2日付 (v.2-p.284) の「ボルゲーゼ宮殿のダナエ」と, 同11月23日付 (v.3-p.181) の「結晶作用」について, 同12月4日付 (v.3-p.235) の「(H.B.氏とは) 著者のアンリ・ペール氏である」*L'auteur de ce livre, Henry Beyle* (原文のまま) という断りである。

c. ミシェル・レヴィ版に拠らない改訂, 増補, 削除

以上の改訂, 増補を見ただけでも, ミシェル・レヴィ版が, スタンダールの遺した自家本を軸にして「完全版」を作ろうとしたことが窺えるが, それにもまして, 子ヴァン版では, ミシェル・レヴィ版のなかでもセルジュ・アンドレ本のスタンダールの書き込みをもとにした改訂, 増補を採用することに心がけている。はじめに記したように, ミシェル・レヴィ版で採用したものと別に, セルジュ・アンドレ本から数多くの註を付けているが, この自家本によって, マルティノが独自に本文を改訂, 増補した箇所は少ない。念のためにそれらを以下に記しておくことにする。

なかでもいちばん多いのは、ミシェル・レヴィ版と同じく、28年10月5日付の「ローマの教会」に関する記述の箇所、7つの教会について手が加えられている。それらは、サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ聖堂（「平板な」建築）、カプチン会士教会（ドメニキーノのフレスコ画について4行）、サン・マルチェッロ教会（「黄と赤の大理石の魅力的な柱」）、サンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ教会（中世のフレスコ画についての7行）、サンタ・マルティナ教会（聖女の彫像と聖具室について6行）、サント・スピリト・イン・サッシア教会（この付属の病院について3行）、サン・ピエトロ・イン・モンテリオ教会（ミシェル・レヴィ版で増補したものに、さらに手を加え、セルジュ・アンドレ本の書き込みに忠実に改訂したという）である。

他には、長いところで1827年10月12日付（v.1-p.123～124）に見られるローマ建国の年をギリシアの歴史と対比している13行であるが、これはセルジュ・アンドレ本のこの箇所に貼り付けられていた新聞の切抜きで、スタンダールがこれを付け加えるようにこの本のなかで指示していたものだとされる。もうひとつは、28年12月22日付（v.3-p.250）で、フレデリックが観察したイタリア滞在の凡庸なフランス人について述べたくだりに、「平凡な魂の動きがあらわに見える」et l'on voit à nu les mouvements d'une âme commune.という1行が付け加えられている。他は、単語などの短い訂正ないし追加である。つまり、27年12月28日付（v.1-p.278）のle Saint Bambino [le sacré Bambino]、28年5月5日付（v.2-p.40）のOn cite Hazlitt et plusieurs autres reporters.（下線部の追加）、同年7月5日付（v.2-p.303）のボッロミーニについて述べた箇所でcet artiste baroque et plat.（下線部の追加）、同日付（v.2-p.309）のLe chemin qui mène Saint-Jean-de-Latran à Sainte-Marie-Majeure est une ligne droite. [Le chemin qui mène Saint-Jean-de-Latran à Sante-Marie-Majeure est en ligne droite.] などである。

スタンダールの自家本に拠らず（もちろんミシェル・レヴィ版とも関係なく）、この版で訂正している箇所はわずかに1箇所である。それは1828年5月5日付（v.2-p.87）のヴァチカンのラファエッロ室について述べている箇所で、そっけない精神の持主の代表者にあがっている人物の一人に、初版ではステディング Stedingという人物がいるが、カントとフィヒテに挟まれたこの人物をシェリング Schellingに訂正している。註で、これがアルマン・カラッチョの指摘によると記している。

削除について見てみると、すでに指摘したように、デイヴァン版ではミシェル・レヴィ版で削除しているところを、初版に忠実に、削除することなく扱っている⁴⁾。しかし、初版のなかで1827年9月15日付の最後に記されているテスタッチョ山への散歩の部分数行と11月24日付のサン・ピエトロ大聖堂の大きさを記している1センテンスが、他の箇所と内容的に重複するために、セルジュ・アンドレ本の書き込みの指示に基づき、これを削除している⁵⁾。

また28年10月5日付の「ローマの教会」では、サンタ・マリア・イン・ドムニカ教会通称ナヴィチェッラを「前を通るときに立ち寄ることを薦める教会」から独自に除外している。それは「もっとも優れていると思える教会」のリストに入っているため、重複を避けるために削除したと編者のアンリ・マルティノは註（v.3-p.25）を付けている。

d. 初版を守っている箇所

最後に、ミシェル・レヴィ版で初版を改訂した部分で、デイヴァン版が採用しなかった箇所についていくつかの例を見てみよう。今度は [] 内がミシェル・レヴィ版の訂正、増補である。

- (1) 1827年8月20日付（v.1-p.55）：M. de La*** [M. de Laval]
- (2) 1827年11月24日（v.1-p.165）：Le jet le plus élevé monte à soixante-quatre pieds
[Le jet le plus élevé monte à neuf pieds]（註なし）
- (3) 同（v.1-p.169）：L'obscurité que l'on aperçoit [L'obscurité qui régne]
- (4) 1827年12月5日付（v.1-p.223）：Voir l'affaire des tabacs en avril 1829. [全体を削除]
（註なし）
- (5) 1827年12月13日付（v.1-p.257）：on trouve à droite la grande église de Saint-Charles, qui n'est remarquable que par sa masse et sa coupole à double calotte. Nous avons vu ensuite le palais Ruspoli ~ [下線部の削除]（註なし）
- (6) 1828年3月27日付（v.2-p.17）：Le ceneri [Il cenere]（註なし）
- (7) 1828年6月2日付（v.2-p.94）：son amitié [son aversion]
- (8) 1828年5月29日付（v.2-p.114）：dans deux anneaux [dans des anneaux]（註なし）
- (9) 1828年5月30日付（v.2-p.122）：d'autres antiquaires qui donnent d'autres explications [des antiquaires qui donnent d'autres explications]（註なし）
- (10) 1828年6月1日付（v.2-p.153）：On essaya, en vain, à ~ [En vain, on essaya, à ~]
ただし初版では On essaya のあとのヴィルギュルはない（註なし）
- (11) 1828年6月5日付（v.2-p.158）：Voilà une femme qui peut lire le Dante, et le mari aussi, tel qu'il se promène aujourd'hui. [下線部の削除]（註なし）
- (12) 1828年7月5日付（v.2-p.301）：prendre le possesso [prendre possession（C'est la cérémonie du possesso）]（註なし）
- (13) 1828年7月5日付（v.2-p.311）：Les Egiptiens peuple stupide avaient ~ [下線部の削除]（註なし）
- (14) 1828年7月9日付（v.2-p.337）：La villa Madama, le palais Stoppani, la Navicella, la cour de Saint-Damase ~ [下線部の削除]（註なし）

- (15) 1828年10月16日付 (v.3-p.62) : le pape PieVII envoya ici un cardinal (中略). Ce cardinal ~ [le pape PieVII envoya ici le prêlat Rivarola (中略). Ce futur cardinal ~]
- (16) 1828年10月20日付 (v.3-p.107) : dit Paul Jove [dit Jove] (註なし)
- (17) 1828年11月23日付 (v.3-p.189) : je conviens ~ [je convins ~] (註なし)

以上に見られるような具合であるが、ミシェル・レヴィ版でロマン・コロンの考えで訂正、ないし削除した部分をマルティノは初版のものに直している。以上の例のうち、(1)、(3)、(7)、(15) だけに付註があり、他のものには特に断りがないのは、初版を尊重する意味であらためて註をつけるには及ばないというところであろう。

ディヴァン版は、見てきたように、初版を尊重し、改訂はあくまでもスタンダールの手によるものを取り入れることに努めている。ミシェル・レヴィ版独自の訂正についても相当箇所では採り入れているが、細かな部分に留め、ディヴァン版独自の訂正は抑制している。それはこのテキストの序文でマルティノが述べていることがまさに実行されていると見てよい。

「原則として、ひどい誤植もしくは明白な間違いを除いて、わたしは初版に従った。しかし、セルジュ・アンドレ本、ラ・ボーム本、クロゼ本に基づくスタンダールの訂正を用いて、ここに、このうえなく示唆に富んだたくさんの情報、詳細、対照を導入した。これらの訂正のあるものは、エラートゥム [過誤] を生み出すやむをえない性格があり、したがって、コロンのすでに行なったように、今度はわたしが、恐れずにそれらをテキストに加えることにする。それ以外のところでは、著者 [スタンダール] は単にヴァリエントを示しているか可能な展開を示しているにすぎない。それで、わたしはこれらの提示には、註の対象しか見ようとしなかった。それでも、いたるところで、最初のテキストに付された変更と追加を示したが、読者はさほど手間をかけずに、初版と、著者の明らかな意思に基づく改訂増補版のあいだに境を確定することだろう」 [v.1-p.XXIV]

しかしながら、わたしがすでに見たように、全体的に本文中での改訂、増補はほとんどが、自家本に基づくとはいえ、ミシェル・レヴィ版で行なったものを踏襲していて、マルティノ自身は思い切ってテキストを独自に改訂、増補することを努めて避けている。それが註での指摘に膨らんだわけだが、初版とミシェル・レヴィ版のあいだでテキストを確定しながら、実に誠実に新版を作り上げているといえよう。

2. シャンピオン版

ディヴァン版と並んでスタンダール全集の双璧をなすシャンピオン版は、ディヴァン版と相前後してポール・アルブレ Paul Arbelet とエドゥワール・シャンピオンの監修 (のちにはアルブレ単独の監修) によって刊行された。この全集は1913年から40年までに33巻14作品

と、補巻としてアンリ・コルディエ Henri Cordier 編の『スタンダール著作目録』 BIBLIOGRAPHIE STENDHALIENNE を刊行して中断されたが、高名な文学者の序文と、スタンダール研究の第一人者たちの編集による解説と細かな註釈によって、権威ある全集となっている。『ローマ散歩』は、アンリ・ド・レニエ Henri de Régnier の序文を付けて、アルマン・カラッチョの編集により1938年から40年にかけて全3巻で刊行された。

この版の『ローマ散歩』の特色は、全体で2100箇所以上もの細かな註を巻末に付け、当時の研究成果を集約したきわめて専門的な版になっていることである。とりわけ、スタンダールが種本とした書物を徹底的に検証して、原文を対照し、それらをどのように使っているか、剽窃に近いまでの引用箇所、インスピレーションに寄与した箇所等々を明らかにしている。種本も、ニビー Nibby, ラランド Lalande, シスモンディ Sismondi, ポテル Potter をはじめ、デュパティ Dupaty, シモン Simond, ミッソン Misson, デュクロ Duclos, ナルディーニ Nardini, ド・ブロス De Brosse などの著作、『ローマ日日新聞』 DIARIO DI ROMA, 『コンステイテューションネル』 CONSTITUTIONNEL, 『法廷新聞』 GAZETTE DES TRIBUNAUX などの刊行物、さらにスタンダール自身の『イタリア絵画史』 HISTOIRE DE LA PEINTURE EN ITALIE, 『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』 ROME, NAPLES ET FLORENCE や書簡など多種多様に涉っていて、ある点ではスタンダールの創造の秘密が暴かれている感がある。

異本の比較対照についても微細を極め、本文テキストでは290箇所あまりで検討を加え、これとは別に自家本に関する註をおよそ70箇所付けている。シャンピオン版で特徴的なのは、ディヴァン版では控えめであった自家本によるテキストの変更を思い切って行なっていることである。セルジュ・アンドレ本=ミシェル・レヴィ版の改訂・増補を積極的に採用したばかりか、ロワイエ本、ラ・ボーム本、さらにはクロヴィス・ブッチ本 *exemplaire Clovis Bucci* によってテキストを補っている。(この最後の自家本はチヴィタヴェッキアのブッチ家に遺されたスタンダールの蔵書⁹⁾のなかに発見されたもので、初版2巻を4巻に分冊したものの4巻目にあたるが、見るべき書き込みは少ないと言われる。)しかしここでも、ミシェル・レヴィ版で行なったロマン・コロンの改訂、増補、削除などで、その根拠が明らかでないものについては採用を控え、自家本の書き込みなどでスタンダールの意思が明確なものだけの採用を心がけている。それはかなり徹底していて、ディヴァン版では50箇所以上あったミシェル・レヴィ版独自の改訂箇所の採用が、ここでは数箇所に留まり、そのかわり註での異本の指摘が膨らむ結果となった。

以下に、ヴィクトル・デル・リット Victor Del Litto とエルネスト・アブラヴァネル Ernest Abravanel の監修のもとに1970年代にセルクル・デュ・ビブリオフィル *Cercle du Bibliophile* から配本された全集に収められた、シャンピオン版の新版である『ローマ散歩』全3巻によって検証していくことにする。

a. セルジュ・アンドレ本による訂正、増補、削除

セルジュ・アンドレ本で訂正などが行なわれ、ミシェル・レヴィ版が採用したものについては、そのほとんどがディヴァン版に引き継がれていることは前章で見た。しかし、ディヴァン版では、註での指摘に留まり本文テキストには加えられていないものがいくつかあった。シャンピオン版はそのなかから少数ながら拾い出して本文のなかに場所を与えている。またディヴァン版がミシェル・レヴィ版固有の訂正であると見なしているものについても、さらに精査したうえ、セルジュ・アンドレ本に基づく訂正として本文のなかに加えている。それらは以下のとおりである。

- (1) 1827年9月26日付 (v.1-p.91) : Ce ne sont que crucifix qui parlent, que madones qui se fâchent, qu'anges qui chantent les litanies à la procession : tout cela s'est renouvelé en 1814 et a duré jusqu'en 1820. 下線部を増補。ディヴァン版では註に置かれている (v.1-p.113)
- (2) 1828年10月5日付 (v.3-p.7) : 「前を通るときに立ち寄ることを薦める教会」のなかにサン・カルロ・ア・カティナーリ教会を加え、ドメニキーノのフレスコについて記述。ディヴァン版では初版にならって、この教会はこれらの教会のなかには入っていない
- (3) 同 (v.3-17) : サンタ・マルティナ教会の記述のなかで、《Pierre de Cortona fit orner à ses dépens ~》と初版やミシェル・レヴィ版の Pierre de Cortona fit faire à ses dépens ~を訂正。ディヴァン版は初版に拠る
- (4) 1827年12月13日付 (v.1-p.207) : ローマの極右主義者について4行を増補
- (5) 1828年7月28日付 (v.2-p.293, note) : ボルゲーゼ宮殿のダナエについて6行

わずかに以上の5箇所である。このうち (4) と (5) は、ディヴァン版において、ミシェル・レヴィ版独自の増補であると見なされ、それを指摘する註がわざわざ付けられているのであり、前章のbの最後にそうした増補のなかに加えてすでに提示してある。シャンピオン版の註では、この書き込みが加えられているセルジュ・アンドレ本のフォリヨ（書き込みのために綴った紙）ページまで記されているので、ディヴァン版の見落としと推測される。

しかし、ミシェル・レヴィ版で採用されていないセルジュ・アンドレ本のスタンダールの書き込みが意外と多いことが、シャンピオン版の註で明らかになった。以下に、本文中での訂正・増補と削除を順に拾い出してみる。[] 内はミシェル・レヴィ版であるが、断りのないかぎり、これは初版と同一である。

- (1) 1827年8月3日付 (v.1-p.8) : circonstance que l'on ne rencontre pas dans les autres

- cours. [circonstance que l'on n'observe pas dans les autres cours.] デイヴァン版では註でヴァリエーションとして提示
- (2) 1827年12月28日付 (v.1-p.227) : le sommet oriental de la colline (où il a été remplacé par la sombre église d'Ara Coeli et le saint Bambino) [le sommet oriental de la colline (où il a été remplacé par la sombre église d'Ara Coeli et le sacré Bambino)] デイヴァン版でも訂正, 付註
- (3) 1828年4月5日付 (v.2-p.95) : On cite M. Hazlitt et plusieurs autres reporters ~ [On cite plusieurs reporters ~] デイヴァン版でも訂正, 既出 (1-c)
- (4) 1828年7月5日付 (v.2-p.316) : Le chemin qui mène (中略) est une ligne droite [Le chemin qui mène (中略) est en ligne droite] デイヴァン版でも訂正, 付註, 既出 (1-c)
- (5) 同 (v.2-p.317) : エジプト人について記した箇所, 「かれらの聖刻文字は, 現実に解読されたところで, 平凡なことしか言っていない」 Leurs hiéroglyphes si on les devine réellement ne disent que des platitudes. と増補. デイヴァン版では註のなかでこの文章を提示
- (6) 同 (v.2-p.318) : en approchant de la Douane de Rome [en approchant de la Douane de Rome, près la Porta del Popolo] 初版は en approchant de la Porta del Popolo となっている. デイヴァン版の訂正については既出 (1-a)
- (7) 同 (v.2-p.319) : サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノについて美的な価値がないことを記したあと, 「月並みな大建築物を完成させるために, たくさんの金が使われた」 On a dépensé beaucoup d'argent pour arriver à un gros bâtiment commun. と増補. デイヴァン版は註によってこの文章を示す
- (8) 1828年10月3日付 (v.2-p.360) : Rassuré à cet égard, il a bien voulu promettre sa protection à la jeune femme. [Rassuré à cet égard, il a bien voulu prendre la jeune femme sous sa protection.] デイヴァン版は訂正なし
- (9) 同 (v.2-p.360) : elle a été mariée à dix-sept à une espèce de fat, assez âgé et ennuyeux au possible. [elle a été mariée à dix-sept à une espèce de fat, assez âgé et ennuyeux au suprême degré.] デイヴァン版は訂正なし
- (10) 同 (v.2-p.360) : C'était un bel homme, mais fort brun. Il avait l'air fort timide. [C'était un très bel homme, mais fort brun. Il avait l'air fort timide.] 初版ならびにデイヴァン版の訂正については既出 (1-a)
- (11) 1828年10月5日付 (v.3-p.2) : Saint-Jean-de-Latran - Basilique; rien pour la beauté. のあとに, 「平板な建築」 Architecture plate. と増補. デイヴァン版では [] を付

して本文中に追加し、註で説明

- (12) 同 (v.3-p.7) : San Carlo al Corso (中略) Cette église est grande sans être belle ainsi que Sant'Ignazio comme Saint-Louis-des-Français, etc. ミシェル・レヴィ版ではこの項目の教会自体を削除している。初版では ainsi que が comme となっていて、デイヴァン版もこれを踏襲
- (13) 同 (v.3-p.16) : Santa Maria della Vittoria (中略) L'intérieur est fort joli, prodigalité de marbres superbes. ミシェル・レヴィ版ではこの項目の教会自体を削除している。デイヴァン版は下線部を [] によって追加しているが、註はない
- (14) 同 (v.3-p.21) : San Spirito in Saxia について凡庸な絵画を所蔵していることを述べたあと、「この施療院には1万5千エキュの収入がある。諸君は、貧民たちの持ち物を守る男のもとで働くジル・ブラスを覚えているだろうか」 Cet hôpital a 15000 écus de rente. Vous rappelez-vous Gil Blas entrant au service d'un administrateur du bien des pauvres? と増補。デイヴァン版では [] によって追加しているが、註はない
- (15) 1828年11月28日付 (v.3-p.159) : Pamfli: architecture de l'Algarde, et squelettes singuliers tombant en poussière; のあとに、「立派な松の木、魂を高揚させる」 pins superbes et élevant l'âme と増補。諸版にはない
- (16) 1828年12月4日付 (v.3-p.177, note) : 本文中で depuis deux ans on n' a chassé que trois français, M. H.B. était l'un de trois. と書いている部分に、註で「H・ベール」 H.Beyle と追記している。ミシェル・レヴィ版では既出 (1-b) のように L'auteur de ce livre, M. Henry Beyle (原文のまま) と註が付けられていて、デイヴァン版に引き継がれている
- (17) 1829年2月1日付 (v.3-p.227) : C'est lui qui (中略) a inventé l'idéal, のあとに「ししかれの理想はもはやわれわれのものとは違う」 mais son idéal n'est plus le nôtre. と付け加えられている。ミシェル・レヴィ版では「ミケランジェロの生涯と作品」全体を削除している。デイヴァン版では註を付けて、そのなかに掲げている
- (18) 同 (v.3-p.230) : Ce n'était qu'en tremblant que Michel-Ange restait à Florence; 初版では Michel-Ange ne restait à Florence qu'en tremblant とある。デイヴァン版では初版を踏襲し、註でヴァリエーションがあることを指摘している
- (19) 1829年3月31日付 (v.3-p.267) : PieVII (中略) dit d'une façon assez obscure toutefois: Celui-ci viendra après moi. [PieVII (中略) dit d'une façon assez obscure toutefois: Celui-ci sera mon successeur.] デイヴァン版は訂正なし

このほかに、27年8月29日付 (v.1-p.60~62) のガイドの『曙 (アウロラ)』などについて

て記されている2ページあまりと、28年4月17日付 (v.2-p.97,note) の「聖ペテロはローマに来たかどうか」、それに28年10月5日付 (v.3-p.14) のサンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ教会の記述の後半3分の1にあたる墓碑についての部分は、ミシェル・レヴィ版でも増補されているが、相異があり、自家本からの取捨選択や解説には、編者の判断が左右していることをうかがわせる。

また、ここでは検証の対象外とするが、付録のローマ皇帝や教皇のクロノロジー、著名芸術家一覧 (ミシェル・レヴィ版では削除) にも大幅な訂正・増補がある。

次に削除について見てみることにする。セルジュ・アンドレ本の指示によるものは6箇所、これらをシャンピオン版では本文テキストから削除している。

- (1) 1827年9月15日付 (v.1-p.78) : 初版やミシェル・レヴィ版でこの日付の最後に付け加えられているテスタッチョ山についての7, 8行が削除されている。これは他の場所への移動の指示による。ディヴァン版でも削除し、註を付している
- (2) 1827年11月24日付 (v.1-p.145) : L'axe de Saint-Pierre suit à peu près exactement la ligne d'orient en occident.のあとにこの大聖堂の「長さ」と「幅」が付け加えられているが、「繰り返し、150ページを見よ」という書き込みにより削除。ディヴァン版でも削除し、註を付している
- (3) 1828年7月8日付 (v.2-p.334) : De San Stefano Rotondo nous sommes allés rejoindre nos compagnes de voyage à Navicella.のあとに、ナヴィチェッラの説明があるが、これを削除。ミシェル・レヴィ版でも削除しているが、à Navicellaの部分があるが、sur le mont Coeliusに変わっている。ディヴァン版でも削除し、付註
- (4) 1828年7月11日付 (v.2-p.345) : c'est ce que ce grand homme a fait de plus semblable à Michel-Ange.に続く《Et à mon gré il surpasse Michel-Ange.》を削除。ディヴァン版では削除せずに、註で自家本に faux (誤り) とあることが付け加えられている
- (5) 1828年10月5日付 (v.3-p.3) : Santa Maria della Navicella - Position charmante のあとの《architecture délicieuse de Raphaël, vingt colonnes superbes》を削除
- (6) 1828年10月20日付 (v.3-p.94) : Le 28 mai 1721, Innocent XIII, Conti, succéda à Clément XIのあとの《Ce pauvre pape ne fit qu'un cardinal, l'abbé Dubois et en mouru de douleur.》を削除

シャンピオン版での削除を見てみると、ミシェル・レヴィ版での多くの削除が、自家本によるものでなく、編者ロマン・コロンの恣意、ないしは編集方針によるものであることが明らかである⁷⁾。

b. ミシェル・レヴィ版に基づく訂正

しかし、シャンピオン版は、すでに記したようにミシェル・レヴィ版に見られる初版との相異部分を註に拾い出しながら、数箇所での訂正を採用している。

- (1) 1827年8月3日付 (v.1-p.12) : *Quam minimum credula postero* [*Quan minimum credula posteri*] ホラティウスの『オード』からの引用「翌日はできるだけ当てにするな」の意味だが、初版は古い用法によって書いているようだ
- (2) 1827年11月20日付 (v.1-p.125) : *Pendant cinq ans*, M. le marquis Sanguinetti ~ [*Pendant vingt-cinq ans*, M. le marquis Sanguinetti ~] 明白な誤りとして訂正
- (3) 1827年11月24日付 (v.1-p.139) : *Le sommet est à quatre-vingt-six pieds du pavé, c'est vingt et un pieds de plus que ~* [*Le sommet est à quatre-vingt-neuf pieds du pavé, c'est vingt-quatre pieds de plus que ~*] (註になし)
- (4) 1828年7月10日付 (v.2-p.343) : *Albenga, le 16 germinal (5 avril 1796)* [*Albenga, le 16 germinal (6 avril 1796)*] ミシェル・レヴィ版には革命暦に年号がan IVと入っている

以上の4箇所だが、(3)のように註にないところもあるので見落としがあるかもしれない。シャンピオン版の編者としては、テキストに正確を期すために、初版の誤りをなおすなど、諸本、諸版を参照し、検討しているわけであり、ミシェル・レヴィ版の訂正の採用は結果的に同一になったに過ぎないのかもしれないが、相異部分を拾い出し、わざわざ註を付けているのだから、註がないのは偶然と考えたい。

しかしながら、27年8月16日付 (v.1-p.24) の「ユダヤ人に勝利したウェスパシアヌスはこの凱旋門の下を通った」云々の箇所や、28年10月1日付 (v.2-p.352) の「ナポリを見て死ぬ」のイタリア語について、註でミシェル・レヴィ版のヴァリエントをあげているが、こちらの版では初版に付けられた正誤表に基づいて訂正しているのであり、この点で、シャンピオン版は見逃しがある。正誤表のなかのもうひとつ重要な訂正である28年12月22日付 (v.3-p.190) の《*et on lui dit que ~*》の主語である不定代名詞の脱落の訂正については、わざわざセルジュ・アンドレ本=ミシェル・レヴィ版の訂正として付註のうえ本文テキストで補われている。細かにテキストを分析、検討しているシャンピオン版に、思いがけない手落ちがあったことになる。わたしは、プレイヤー版の同じ手落ちを指摘したが⁸⁾、おそらくその源はこの版にあったのだろう。

c. 諸本による訂正と増補

はじめに記したように、シャンピオン版は、セルジュ・アンドレ本以外に、ロワイエ本、

ラ・ボーム本、クロヴィス・ブッチ本などによってもテキストの訂正や増補を行なっているのでそれらを見てみよう。[]内はあいかわらず初版のテキストである。

まず、ロワイエ本の訂正、増補だが、すべてが27年の8月、つまりテキストの最初の方に集まっている。

- (1) 1827年8月3日付 (v.1-p.9) : il est beaucoup plus imbécile que son voisin le fils du cordonnier ou du marchand. [il est beaucoup plus imbécile que son voisin le cordonnier ou le marchand.]
- (2) 同 (v.1-p.12) : La terreur régné à Ravenne et à Forli et les nobles de ces pays-là sont tout aussi persécutés que les plébéiens. Beaucoup de prêtres de ces pays-là sont libéraux. Les hommes les plus distingués sont en prison ou en fuite. 下線部を増補
- (3) 1827年8月15日付 (v.1-p.17) : Ne soyons pas trop polis, leur ai-je dit ce matin. Supposez deux voyageurs bien élevés ~ 下線部を増補
- (4) 同 (v.1-p.20) : Vous trouverez tout cela fort laid ou du moins fort insignifiant, et serez étonné de l'honorable mention que j'en fais ici. 下線部を追加
- (5) 同 (v.1-p.21) : ~ au palais Rospigliosi, place de Monte-Cavallo. Le prince Rospigliosi permet d'entrer le mercredi et le samedi. 下線部を増補
- (6) 同 (v.1-p.22) : Les pauvres têtes qui ont le pouvoir ne font ouvrir ces musées qu'une fois la semaine et les mêmes jours (lundi et jeudi) les musées du Capitole et du Vatican qui sont à une lieue; 下線部を増補
- (7) 1827年8月16日付 (v.1-p.23) : l'on est exposé à passer sur des voûtes bien amincies par les pluies et qui peuvent céder sous le poids de votre curiosité. [l'on est exposé à passer sur des voûtes bien amincies par les pluies et qui peuvent s'écrouler.]
- (8) 同 (v.1-p.23) : sur cette basilique de Saint-Paul, incendiée en 1823. [sur cette sublime basilique de Saint-Paul, incendiée en 1823] 下線部の削除
- (9) 同 (v.1-p.23) : Elle est à demi cachée par de longues files de cyprès d'un couvent qui est sur le premier plan tout près du Colysée. Saint-Paul-hors-les -Murs sur la rive du Tibre fut bâti ~ [Elle est à demi cachée par de longues files de cyprès. Cette église fut bâtie ~]
- (10) 同 (v.1-p.24) : Je le sens trop, de telles sensations peuvent s'indiquer, mais ne se comuniquent point. Elles se rassablent en gerbes et prennent les épis de tous les souvenirs de toute une jeunesse agitée. Ailleurs, ces souvenirs ~ 下線部を増補
- (11) 1827年8月16日付 (v.1-p.25) : Ils furent criminels quelquefois, mais jamais l'homme n'a été plus grand. Et l'on se sent disposé à mépriser les vaincus. 下線部を増補

- (12) 同 (v.1-p.26) : L'on verra un théâtre ovale, d'une hauteur enorme, (中略) mais ruiné vers le midi parce que pendant deux cents ans il a servi de carrière aux Farnèse, aux Barberini, à tous les neveux de pape qui bâtissent un palais; il contenait cent sept mille spectateurs. 下線部を増補
- (13) 1827年8月20日付 (v.1-p.44) : M. le duc de Laval est l'homme aimable par excellence: [M. de La*** est l'homme aimable par excellence:] ミシェル・レヴィ版ではM. de Lavalとある
- (14) 同 (v.1-p.45) : il représente sa nation telle qu'elle était autrefois. Il a même cette pointe de bizarrerie aimable. Il s'arrête dans la rue devant Policinelle. 下線部を増補
- (15) 同 (v.1-p.46) : on dit, dans l'occasion, quelques mots en faveur de Dieu ou plutôt de son alentour. 下線部を追加

以上であるが、これらはディヴァン版ではすべて註のなかで、ヴァリエントが示されているか増補部分が掲載されている。

これらの訂正や増補は、かなり入念なものであることが分かり、(2) や (10) にはスタンダールらしい書き方が見られるが、この調子で筆を加えていったとしたら、『ローマ散歩』はようになっていたであろうか。

これに対して、ラ・ボーム本の訂正はささやかなものに留まっている。

- (1) 1827年12月11日付 (v.1-p.199) : Après quatre ans d'exercice, on ne peut faire plus de trois cardinaux ~ [Après quatre ans d'exercice, on ne peut point faire de cardinal ~]
- (2) 1827年12月13日付 (v.1-p.204) : La seconde chapelle à gauche en entrant appartient à la famille ~ [L'avant-dernière chapelle appartient à la famille ~]
- (3) 同 (v.1-p.207) : cela tient peut-être à l'instinct de cette race d'homme ~ 下線部が追加
- (4) 1827年12月16日付 (v.1-p.209) : Tous les enterrements de bon ton viennent y passer à la nuit tombante (à trois heures de nuit). [Tous les enterrement de bon ton viennent y passer à la nuit tombante (à vingt-trois heures et demie).]
- (5) 1828年1月15日付 (v.2-p.9) : Malheureusement il se trouve un jour que le principal personnage, le héros d'un des vaudevilles s'appela Saint-Ange ~ [Malheureusement il se trouva un jour qu'un des personnages d'un de ces vaudevilles s'appelait Saint-Ange ~]
- (6) 同 (v.2-p.10) : et l'on s'étonne de la haine du peuple de Rome! Le bourgeois ne vit que des douze ou quinze écus qu'il grapille chaque mois sur le gouvernement, et il

n'obtient d'avancement qu'à l'aide d'une foule de lettres anonymes. 下線部は増補

- (7) 1828年1月28日付 (v.2-p.24) : L'atrocité des lois de Napoléon, pour parler comme M. le cardinal Rivarola, avait corrigé cette mauvaise habitude. [L'atrocité des lois de Napoléon, pour parler comme M. le cardinal N. avait corrigé cette mauvaise habitude.]
- (8) 1828年7月15日付 (v.2-p.348) : Il paraît trois fois la semaine. [Il paraît cinq fois la semaine.]
- (9) 1828年10月20日付 (v.3-p.100) : Quoique ennemis ils s'abordèrent et se parlèrent avec une certaine politesse, ~下線部が追加

以上のなかで (6) だけが、少し内容のあることを付け加えている。

最後にクロヴィス・ブッチ本による追加をあげておく。これは2箇所にすぎない。下線を付けたところが追加部分である。

- (1) 1828年10月5日付 (v.3-p.6) : Sant'Atanasio de'Greci — (中略) Voir deux tableaux du cavalier d'Arpin, peintre adroit et médiocre à peu près de la taille de M. Agricola que je cite plus haut.
- (2) 1829年2月1日付 (v.3-p.232) : Ici se trouvent dans une position hasardée saint Blaise et sainte Catherine ~

(1) は「ローマの教会」のところで画家アルピーニについて補足、当代の画家アグリコラを引き合いに出して低い評価をくだしている。(2) は「ミケランジェロの生涯と作品」のなかの「最後の審判」についての部分でそこに描かれた二人の聖人の様子を補足している。

以上に見るように、シャンプイオン版では初版を尊重しながら、スタンダールが自家本に行なった書き込みや指示を生かすことに努め、それを可能な限り本文テキストのなかに反映させている。その一方でロマン・コロンの編集したミシェル・レヴィ版をかたわらに置いて、この版で初版がどのように改変させられたかを細かく付註している。「カトリックの一般信徒」を指す *laiques* という単語も初版に戻して《*laics*》とし (v.1-p.11)、逆に、ミシェル・レヴィ版で *bivac* と綴り、ディヴァン版もこれを踏襲した「野営 (ビヴァーク)」を意味する単語を、正しく《*bivouac*》と初版どおりに訂正している (v.2-p.47)。誤りは訂正し、初版でもミシェル・レヴィ版でも *la sanite* と書いている単語にアクサン・テギュを付して《*la sanité*》と直している (v.2-p.213)。これは『19世紀ラールス辞典』によればラテン語の *sanitas* を語源とする単語だが、ここではイタリア語の「正統性」を意味する *la sanità* からきているものと考えられる。また、固有名詞でも、実在の人物、土地と考えられるものは主として綴りに正確を期しているが、*Steding* は前後関係から《*Schelling*》と推測して訂正 (v.2-p.132) している。しかしローマのレストランとして登場する《*Franck*》は、ミシェル・レ

ヴィ版やデイヴァン版で訂正された実在の店とされる Franz としないで、初版のままに残している (v.1-p.15)。確かに実在の「フランツ」であるのかもしれないが、作家は、読者がこの店を想像することをある程度予想して、わざと少し改変して記した名前であるようにも推測される。

シャンピオン版においては、ミシェル・レヴィ版のテキストを十分に検討したうえで、自家本の書き込みにこだわり、初版のテキストから、スタンダールの望んだような新版のテキストを作成しようという意図が見られるのである。

結

ふたつの大きなスタンダール全集から、『ローマ散歩』のテキストについて検証を行ってきたが、初版のテキストに加えて、スタンダールに近いところにいた親族のロマン・コロンが、スタンダールの遺志に基づいて出版したというミシェル・レヴィ版が存在するだけでなく、自家本の多数の書き込みが発見されたことから、テキストの確定はデイヴァンとシャンピオンの両版のあいだで大きく異なることとなった。

デイヴァン版は初版を尊重しながら、「セルジュ・アンドレ本＝ミシェル・レヴィ版」の訂正と増補をほとんどすべて受け入れ、またミシェル・レヴィ版独自の訂正などについても採用をためらってはいない。これらの増補・追加部分を本文テキストに加えるときはクロシェ [] によってそれを明らかにすることに努め、また本文での採用に至らなかったもの、訂正、削除したものは脚註で示すなど配慮している。さらに、デイヴァン版では、セルジュ・アンドレ本の訂正や増補でミシェル・レヴィ版が採用に至らなかったものについても、註を付けて明らかにしているが、デイヴァン版が独自にそれらを本文に取り入れることは抑制している。

これに対して、シャンピオン版は頑ままでに初版のテキストを守り、ミシェル・レヴィ版独自の改訂を排除しながら、一方でスタンダールの自家本の書き込みや指示を忠実に受け入れ、その点では大胆といえるまでにテキストを改変している。スタンダール自身の書き込みとはいえ、テキスト全体に及ぶものではなく、書き方もメモ書きであったりして、必ずしも決定稿を形成するものではないが、そこから可能なかぎりのものを掬い出している。

すでに知られているように、スタンダールは手元の本⁹⁾の欄外に、日常のメモから、思いついた事柄まで、あらゆることを書き込むのが習慣になっていた。たとえば、セルジュ・アンドレ本の欄外には過去の旅程や訪問のメモなど『ローマ散歩』のテキストとは関係のない事柄がたくさん記されている。そのうえ、テキストと関係のある部分にしても、初版出版との時間の隔たりによって変化した筆者の考えを、テキストのコンテキストに持ち込むことの困難もあるだろう。スタンダールが、ナヴィチェツラに対する評価を一変させたことはす

に触れたが、かれがあとから付け加える形容詞ひとつにしても、そこに執筆時との感情の変化などが読み取れるのではないだろうか。シャンピオン版が、自家本書き込みの本文テキストへの採用に際して、註を欠かさないのは、この点を配慮してのこととも考えられる。

1930年代から40年代にかけて前後して出版されたふたつの『ローマ散歩』は、以上に見てきたように、初版を尊重しながらもミシェル・レヴィ版をつねに念頭に置きながら、それぞれに違った方向を辿って編集され、テキストに特色を出しており、いずれも出版から時間が経っているものの、今もって貴重な原典であることには変わりない。また、これらを通じて、スタンダールにおけるテキスト問題ともいえるものが、多様に展望できるように思われる。

注

- 1) 日本スタンダール研究会編『スタンダール変幻』（慶応義塾大学出版会発行、2002）所載、pp.309～339、本紀要第2部の要旨参照
 - 2) ルイ・クロゼはスタンダールの親友で、スタンダールから書き残したすべての原稿と著書の一部を遺贈された。のちに、クロゼ家所有のスタンダールの原稿はグルノーブル図書館に寄贈され、蔵書はルイ・ロワイエによって整理された。ルイ・ロワイエは1927年に死去して、この自家本はポール・ロワイエが継承した。したがって、シャンピオン版では、ポール・ロワイエ本と呼ばれている。なお、この自家本は現在もロワイエ家で保存されているという。
 - 3) セルジュ・アンドレ本については、前掲書p.312参照
 - 4) ミシェル・レヴィ版の削除については、前掲書pp.316～319
 - 5) これらの削除については次章のa.を参照
 - 6) チヴィタヴェッキアの領事だったスタンダールがパリで死去したのち、任地に残した蔵書の一部は、生前親しくしていて、遺言執行者のロマン・コロンの依頼で遺品の管理を行なったドナート・ブッチに遺された。クロヴィス（イタリア名クロドヴェオ）はその孫にあたる。
 - 7) ロマン・コロンの恣意的な削除については、前掲書p.319参照
 - 8) プレイヤード版の手落ちについては、前掲書pp.325、326参照
 - 9) スタンダールの書き込み例については、ディヴァン版全集の「私的雑記と余白追記」第2集 MELANGES INTIMES ET MARGINALIA IIあるいはセルクル・デュ・ビブリオフィル版全集の「雑記集、第5巻、文学編」MELANGES V LITTERATURE を参照。なお、ディヴァン版同書にはセルジュ・アンドレ本とラ・ボーム本『ローマ散歩』の書き込みが一部取められている。
- * 『スタンダール変幻』所収拙稿の訂正
- p.321「ミシェル・レヴィ版では、(5) だけが訂正されている」を、「ミシェル・レヴィ版では、(1) (2) (5) だけが訂正されている」に訂正
- p.327「(2) 27年11月24日付」を、「(2) 27年11月17日付」に訂正

（この研究は平成12年度跡見学園特別研究費の助成によるものである）